

「埼玉教育」創刊 70 周年に寄せて



埼玉県教育委員会教育長 こまつ やよい 小松 弥生

「埼玉教育」は、創刊 70 周年を迎えました。長きにわたり、県内の多くの教育関係者の皆様に本誌を御購読いただいていることに、深く感謝いたします。

「埼玉教育」は、県の施策や事業の紹介、教育法規の解説、実践論文、若手やベテラン教職員からのメッセージなど、その時々々の旬の話題を提供し、より一層の掲載内容の充実に努めてまいりました。また、各学校での教育課題の解決にお役に立てるよう、平成 26 年度から年 6 回の発行にいたしました。

令和の時代においても、本誌を活用され、子供たち一人一人の成長を支え、様々な能力と可能性を開花させるための取組に一層努めていただければ幸いです。

○教員の働き方改革

イチロー選手が現役引退を表明しました。国際的に活躍している日本人の中でも特に輝いていたので、残念でしたが、引退の会見もさわやかでした。イチロー選手の残した業績には目を見張るものがありますが、その陰で、並々ならぬ努力をしていたのです。誰よりも早く球場に行って練習していたとか、深夜の素振りとか、多くのエピソードがあります。

イチロー選手の精進ぶりが、私には、学校の先生方の勤務に重なって見えてきます。多くの先生方が早朝から出勤されていますし、教材研究、部活動指導、保護者対応などのため、遅くまで学校に残らざるを得ない。教員の場合、イチロー選手のような自己研鑽の部分と義務的な業務を切り分けることが難しいのですが、業務による在校時間をなるべく減らして、心身ともにリフレッシュしたり、自己研鑽したりする時間が持てるようにする必要があります。

○教職員の不祥事根絶

教員の働き方改革と並んで、私の頭を悩ませているのが教職員の不祥事です。最近、勤務が過剰であることと不祥事が起きることとは相関関係にあるのではないかと思います。忙しさからくるストレスによる不祥事、という意味ではありません。以前は、教職員同士で会話する時間がもっとたくさんありました。その中で、様々なノウハウがベテランから若手に伝えられて、自然に悩み事解決にもつながっていたのではないかと思います。時間の余裕がなくなって、教職員同士の絆が薄れてしまいました。そういったことも不祥事の遠因と考えられます。教職員同士の絆を再び深めるにはどうすればよいのでしょうか。

○研究者も対話から新しい知見を

東京大学にカブリ数物連携宇宙機構という特別な研究所があります。世界中からトップレベルの研究者が集まる研究拠点です。初代の機構長、村山斉先生（素粒子物理学者、著書に『宇宙は何でできているのか』など）によると、この機構では、毎週金曜日の午後 3 時に、全ての研究者がオープンスペースに集まってお茶をするのだそうです。理論物理学の研究者は、一人で研究室にこもって研究するのが日常ですが、他の研究者とフランクに意見交換することで思わぬひらめきが得られることがあります。実際、お茶に集った専門が異なる 3 人の研究者が協力して、海外で発表された新説の間違いを発見したこともあるそうです。

○協調学習で、教員同士の学び合いを

実は、似た話を先日、協調学習マイスターの先生方から伺いました。ある高校では、家庭科のマイスターが軸となって、他教科の先生と一緒に協調学習の授業を組み立てています。国語の教員と組んで、フードデザインに国語表現を組み合わせ、校内でのお弁当販売にまで活動を広げることができました。担当した先生も互いに新しい発見があったそうです。

県立学校の「未来を拓く『学び』プロジェクト」では、教員の授業づくりを支援する情報交換サイトを構築しています。ジグソー法による協調学習の実践例や教材の共有を進めるためのものです。現在は、研究開発員の間での利用にとどまっていますが、今後は全県的に利用できるようにする予定です。協調学習をきっかけに、教科の枠を超えて、教員同士が学び合うネットワークが広がっていくことを期待しています。

○学び合いから働き方改革と不祥事防止に

小中学校の県学力・学習状況調査も、子供たちの学力を伸ばした優れた取組を皆で共有するという教員同士の学び合いを促しています。これらの学び合いは、授業研究や教材研究を効率化し、結果として働き方改革に資するものとなっています。授業案も教材も何もかも自分で作らなければならないと考えている教員が多いのではないかと推測しますが、今はそのような時代ではありません。

そうした学び合いの中から教員同士の対話が生まれます。不祥事を防いでくれる絆も、職員室での対話だけでなく、ICT を介するなど、別の形で復活するかもしれません。新しい時代に即した教職員同士の絆の深まりを願っております。